

オチ オサム 《出口ナシ》 1962/2015



ガイドスタッフT

2つの黒い物体にあるガラスで覆われたくぼみ。
ぐぐっと視点を落として眺めてみてください。
灰色の空間には一対のガラスがあり、それぞれの
底面に張られた鏡が互いのガラスを無限に反射
しています。
改めて作品全体を見渡すと、2つの黒い物体はその
重なり具合から「上に登ろうとしているのに下に
降りてしまう」出所のない場所にいるように感じる
不思議な作品です。当時、作者が展覧会への出品
謝礼が少なかったことに失望し制作されたという
この《出口ナシ》、視点を変えると他にも新たな
気づきがあるかもしれません。

藤川栄子 《かける》 1960



ガイドスタッフY

「かける」とは「駆ける」？「掛ける」？ はたまた別の？ 画面左奥には衣桁らしきものが描かれており、どうやらこれは掛けられた着物らしいと分かります。藤川栄子は、戦後活躍が目立つようになった女性作家の一人です。1953年初めて訪ねたパリで、ピカソ本人と交流し感銘を受けた事は彼女に新しい画風をもたらしました。平らな布である着物を平らな画面に立体として描く手法。「扇面流し」という水に流れる扇の古典的な吉祥模様の和服をモチーフに、現代的な手法で描いたこの作品。おしゃれだったという藤川栄子の個性を感じます。

白髪一雄 《無題（赤蟻王 王のシリーズより）》
1964

まずは画面をじっくり観察してみましょう。遠くから見ると平らですが、近くから見ると…。ずいぶん絵具が盛り上がっていますね。つややかな油絵具の線からは、すばやく描いたスピード感が伝わってきます。

この作品はなんと、「足」で描かれました。床の上に寝かせたカンヴァスの上に天井からロープを垂らします。作家はロープにつかまって、絵具をたっぷりつけた足でカンヴァスの上を滑るようにして描いています。まさか？と思いますよね。足跡もありますよ。探してみてくださいね。





ガイドスタッフO

清水 晃 《色盲検査表 No.5》 1963

この作品の中に、数字が隠されています。

少し離れて見てください。分かりましたか？これは色盲検査表です。今度は近づいて見てください。数字が分からなくなった代わりに、男性の気を引くような写真が散りばめられています。これはアメリカの人気雑誌「プレイボーイ」の切り抜きをコラージュしたものです。作者は薬局で見かけた色盲検査表がヒントになり、この作品を作ったといっています。目先の雑念に気を奪われて、肝心なものが見えなくなっていないませんか、まるで作者にからかわれているようですね。

田中敦子 《作品（たが）》 1963

大阪駅前。まばゆいほどの街のネオンを見た時、田中敦子は「この光を身にまとってみよう！」と考えます。その考えは何色にも塗り分けられた約190個の電球とそれをつなぐ無数のコードとでできた《電気服》という作品となり作家自身が着てスイッチを入れるとピカピカと光を放ちました。その服のための配線図はやがてこの作品のように大小の円とそれをつなぐ線の表現となってキャンヴァスに描き続けられました。絵具にも《電気服》の光を再現しているかのような工夫がありますね？





ガイドスタッフF

福岡道雄

《何もすることがない 僕達がピンク色の女王の
アドバルーンとなるとき》 1962-65

立ち並ぶいくつもの棒。宙には何やら薄汚れた、
人魂のようなものが…。

この作品を見たとき、あなたはどんな印象を受け
ましたか？ タイトルもなかなかインパクトがあり
ますね。「するものもないというのか、でも何か
しないといけないという意識」を抱え、廃品に
ポリエチレンをかぶせて作り続けたこの棒たちを、
作家は「今にもこけそうに立つ」人に見立てて
います。そしてピンクは願望や夢といった、きれい
なものを表しているそう。「混沌の状態から脱出
しなくてはならない」「空中へ舞い上がらねば」
そんな作家のものがきが感じられませんか？

岡本信治郎 《東方三賢王の礼拝（聖風景シリーズ）》
1964

カラフルな絵本の様な絵画ですね。緑、赤、黄色の不思議な形。ラッパ？ マンガやアニメのヒーローかしら？ これは三賢王（三賢人）です。イエス・キリスト誕生時にその場で祝福したとされる3人です。ギザギザは冠、上部の細長いものは光のようにも見えます。アクリル絵具で明るくポップに描きました。岡本さんの作品にはユニークなキャラクターが登場し、文字が書かれているものもあります。見て、読んで、笑う絵画としてすみずみまで楽しめるワンダーランド！ ユーモアいっぱいの世界の向こうに作家の深い思いが見えるかもしれません。



篠原有司男 《思考するマルセル・デュシャン》

1965

えっ何だ！？青い地に「人形」が描いてあるよね。これには、実物があって、それも大きなハリボテ人形なんだ！しかも、その頭はモーターでグルグル回転したらしい。この絵はその人形の青写真(設計図)みたいなものといえるね。モヒカン頭でも有名になったこの作家(愛称：ギューちゃん)は、日本に来ていたアメリカの著名な現代美術作家(ロバート・ラウシェンバーグ)に、このハリボテ人形と一緒に公開質問状を読み上げて、現代アートでの戦いを挑んだんだよ！



ガイドスタッフM

ロイ・リキテンスタイン 《ヘア・リボンの少女》
1965

これマンガじゃないの？ コミック・マンガの一コマみたいな女の子が描かれているけど、そこがミソなんだ！「顔の影」の部分を見てみて。丸いドットがたくさんきれいに描いてあるよね。マンガは印刷物だから影を表す方法として、網点（ドット）を利用したりするけど、この絵は、マンガのその特性を取り入れているよ。他にも、女の子をモチーフにしたり、3原色（赤・青・黄）を使ったりして、「みんながよく知っていること（日常性）」を絵画に取り入れているんだ。



ガイドスタッフ M

三木富雄 《EAR》 1965



ガイドスタッフU

1962年に粘土や新聞紙で成形した上に石膏を塗布した最初の耳の作品《バラの耳》を、翌年にはアルミニウム合金で鑄造された耳の作品を発表。以後、様々な耳の作品を制作しますが、そのほとんどが左耳です。

本作は三木の代表作です。素材はアルミニウム合金で、グラインダーで磨かれた鈍く輝く拡大された耳の作品です。彼は友人宅で、突然何メートルにも耳を拡大させるという思いにとりつかれたと語っています。「耳が私を選んだ」として、死去するまで耳の作品を作り続けました。

多田美波 《周波数 37306505》 1965



ガイドスタッフO

銀色に輝く 6 個の半円球。当時は珍しいアルミニウムとアクリル樹脂、鉄を用いた彫刻です。ちょっとデコボコですね。鏡の様な表面に他の作品と一緒に映っているのはあなたの姿です。照明に照らされたキラキラの笑顔が見えましたか？動くと太ったり細くなったりします。作品の一部になる嬉しい体験ですね。

1962 年多田さんは研究所を作りました。新素材の加工・技術開発をするこの場所で多くの立体作品が生まれました。光や周囲の景色を映す美しい作品は、ホテルや野外空間などでも出会えるでしょう。



ガイドスタッフ M

菅井 汲 《太陽の森》 1967

○△□の幾何学的形態。緑、青、黄色など、限定された色数で鮮やかに描かれた作品。《太陽の森》というタイトルから、緑色の○部分は、森の木が風で動いているようにも見えます。黄色は昼の光、青は夜の闇でしょうか。すっきりとした画面に、どこか清々しさも感じる作品は、菅井独自のスタイルです。

余談ですが、作者の菅井は朝、昼、晩、毎日決まったものを食べていたそうです。メニューを考える時間を省き、その分、作品のことを考えていたようで、自身の作品と同じように、生活にも独自のスタイルを確立していました。



ガイドスタッフ Y

新潟現代美術家集団 GUN

《雪のイメージを変えるイベント》写真パネル

1970/2000

雪は美味しいお米を育みますが、豪雪地帯で暮らすと人の命を奪いかねない危険性を含んだ自然現象だと実感します。その一方で、吹雪の翌朝、足跡ひとつない雪原は朝日を浴びてキラキラ輝く純白のキャンヴァスのよう。雪原で麻の上布をさらす新潟の冬の風景は、ストライプの絵画のようにも見えます。

そんな新潟を拠点に活動した GUN（ガン）のメンバーが雪のイメージを壊すように、雪原に巨大なカラフルな抽象画を描いたのもうなずけます。この様子を目撃した住民たちの「こんげガンが芸術かね（これが芸術なの？）」といった新潟弁のつぶやきが聞こえてくるようです。

高松次郎 《扉の影》 1968

描かれているのは、ドアをあけた向こう側、そして人影。影だけなら絵かな、と思うけれど、リアルなドア、そのドアノブをにぎっている男性の影をみていると、つい本物の人をさがしたくなります。そしてドアの内側と中に見える男女の影は、どうやら同じ人のもののようです。ドアをあけて出会った二人、どんな会話をしていたのでしょうか。実際の人を描かず影だけを描くことで、逆により強く登場人物を印象づけられますね。



ガイドスタッフ A

嶋 剛 《HOUSING D74-2》 1974



ガイドスタッフK

巨大な団地がモチーフの作品。それも1点ではなく2点。左右を見比べ、違いを探してみると、影の形から洗濯物までほとんど同じ。ただ、向かって左の作品には、真ん中の辺りに紙のつなぎ目…。実は左の作品、右の絵を撮影した写真なのです。大きさも見た目も同様な、「写真のような絵」と「絵のような写真」が並ぶことで、「絵」と「写真」の違いとは何、との問いが生じます。ただ、1974年の制作から50年近く経ち、左の作品の色が少しセピアになっています。時の経過が2つの違いを現し始めているのかもしれませんが。



ガイドスタッフ N

李 禹煥 《点より》 1974

青い点が左から右へだんだんかすれていきます。少しずつずれて、同じ繰り返しはありません。作家は、日本画用の岩絵具を含ませた太い筆を押し付け、一点一点描いているのです。息を整えて、集中し、ゆっくりしていねいに。完成までどのくらい時間がかかったのでしょうか？

現在、世界的に活躍する韓国生まれの李さんは、幼い頃に伝統の書や画を学びました。筆で「点より」出発することは、彼の原点なのかもしれません。力を入れたり、抜いたりする筆の運び方に、作家の身体の動きや呼吸までも感じられるような気がします。

桂 ゆき 《作品》 1978-79



ガイドスタッフY

人が分け入っていない場所の落ち葉か、冬の早朝の霜柱のように、思わず触れてクシャッとしたところが想像されるような画面です。奥の方から覗く紅色も、着物の裾からちらりと見える色の様に効いています。桂ゆきは20代だった戦前、それがコラージュという技法だとも知らずに、気持ちのままに捨てられていたコルク栓を板に貼り詰めた作品を作りました。そして、時は流れて66才になった桂ゆきの、この《作品》。空気を含んだ画面は絵画か、彫刻か。きっとこの時も思うままに手を動かしたであろう彼女にとってはどうでもいいことだとは思いますが…。

菅 木志雄 《界の仕切り》 1982

一見するとキッズパークの遊具のようです。切り出したままの丸太でできていて、カットした部分を連結したシンプルな作品です。横になった部分を立てれば元の丸太に戻ります。

1960-1970年代、工業製品が大量生産されていた時代に、菅は出来るだけ素材に手を加えず、素材そのものを使い、展示する空間全体を作品にしました。毎年どこかの美術館で個展が開催されるほど、現在も精力的に制作を続けています。



リチャード・ロング

《イングランド・ジャパン・サークルズ》 1981

子どもの頃、自然の中に身を置いてただ無心に遊んだ記憶はありますか？鳥の声を聴き、歩きながら花を摘み、石や小枝を拾い集める。そしてぐるっと丸く並べてみる。こうして見ているだけで、円は不思議と私たちを心落ち着く空間に導いてくれます。

リチャード・ロングは絵具やカンヴァスの代わりに自然の中を歩きながら材料を集め、ランドアートと呼ばれる作品を制作します。イングランドで集めたスレート石が、古代遺跡や禅の思想にも見られる円形に並べられています。自然と対話する方法を私たちに示してくれているようです。



ガイドスタッフT

デイヴィッド・ナッシュ 《門》 1982

森の中で長い間生きてきたこの木は、台風で倒れてしまいました。制作にあたってナッシュはその木があったところに足を運び、作品を構想したそうです。奥日光の森の光や空気を感じながら制作したかったのかもしれませんが。元の木をの形を生かして制作されたこの作品は、自然が作り出す木の幹の豊かな曲線と、チェーンソーが作る人工の直線の対比が印象的です。人が生きていくために自然とどうかかわるか、そんなことを考えさせる作品です。この門をくぐった向こうでナッシュが見たかったのはどんな世界だったのでしょうか。



ガイドスタッフI

石内 都 《『1906 to the skin』より》 1991-93

ここに写されているものは全て人の皮膚です。タイトルの1906とは被写体となった舞踏家の生まれた年です。歳を経た体がふうわり、と動き出すような展示は作家の指示で行われました。

石内さんの他の作品ではアパートメント、着物、遺品など私たち自身を包み、形作るものが写されています。本作では皮膚という1番薄い私たちの外側に在るものを見せることにより、実際には写されていない人物の生きてきた時間をそこにある空気と共に焼き付けているのです。拡大された印画紙の粒だった表面もまたひとつの皮膚のようにも見えます。



遠藤 利克 《泉》 1991

目の前にまっすぐ伸びる長い黒い物体には、丸いあながあいています。暗い部屋にあるので、地下にうめられた管のようにもみえますね。タイトルは『泉』、ですが水らしきものはどこにも見当たりません。制作のようすをビデオでみることができますが、この作品はくりぬいた木の幹をもやし炭にしたものです。木は根で土から吸い上げた水を幹から枝、葉に送ります。かつては水の流れていたことをタイトルから想像しました。みなさんはどう感じられましたか。



ガイドスタッフ A



ガイドスタッフK

蔡 國強

《Project for Extraterrestrials No.8—烽火台を再燃する》

1991

この絵画は、万里の長城に烽火をともすというプロジェクトの計画図です。かつて辺境の地から都への急の知らせは、烽火を中継することで馬よりもいっそう早く容易になりましたが、争いによって広がるのは荒廃する景色ばかり。人々にとって重要なのは自然保護と共生であると作家はうったえます。彼は「福建前線」とよばれた台湾と海峡を挟んだ中国の港町に生まれ、文化大革命の厳しい専制時代に育ちました。日本への留学、アメリカでの生活から様々な文化を背景に、火薬という中国伝統の表現を用い、国や地域を超えた普遍性を描いています。

※烽火とは…のろしを上げること。

笠原恵実子

《Untitled -石の花-》 1991



ガイドスタッフS

タイルとガラスのケースに大理石の薔薇が保管されています。作品のモチーフとなったロシア民話「石の花」は、俗世を捨て創作に没頭する石工の物語です。作家は、石と格闘して世界にたった一つの作品を造りあげるといふ、彫刻のマッチョな側面に疑問を抱いていたそうです。物語の中の「石の花」を「現実から切り離され、意味が欠落した彫刻の象徴」ととらえ、「石の花」を再現するために、あえて作家の手の痕跡をなくしたかったといいます。今まで求められた価値を手放すことで開かれる新たな世界への挑戦だったのかもしれない。

トミエ・オオタケ（大竹富江）《Untitled》 2008

ゆるやかに、のびやかに、自由に進む白い曲線。「見る人の感じ方を大切にしたい」と作品に題はつけなかったそうですが、あなたはどんなイメージをもちましたか？

オオタケは 1913 年京都で生まれ、ブラジルへ移住。独学で絵を描き始め、幾何学的な抽象絵画や彫刻を制作し、2015 年に 101 歳で亡くなるまでブラジルを代表する作家として活躍しました。

大正生まれのハイカラ女性が遥かブラジルで好きな道を極めて成功を修める、なんて素晴らしいのでしょうか！その精神が作品にも表れていると思いませんか。

ガイドスタッフ T



アルナルド・ポモドーロ

《太陽のジャイロスコープ》 1988

直径約 4m！ 重量約 5 トン！ 建築や舞台美術も学んだイタリアの彫刻家ポモドーロらしいスケールの大きさです。大きさだけでなく二つに分かれた円盤に刻まれた深く鋭い裂け目のような形にも注目してみてください。天の星々の位置やその動きを知るためにつくられた中世の天球儀がヒントとなったこの作品、かつては 24 時間かけてゆっくりと回転していました。

今はこの空間で天気や時間によって変化する太陽の光を受けてさまざまに違った表情を見せてくれます。

さて、今日の空模様は？



ガイドスタッフ S

アンソニー・カロ 《シー・チェンジ》 1970

「鉄」といえば硬く重い工業用の材料をイメージする方が多いでしょう。1959年アメリカで見た抽象彫刻に刺激を受け、カロは鉄に赤や黄などの鮮やかな彩色を施し、台座を取り払い、軽やかで自由な形を生み出しました。新しい鉄の彫刻の誕生です。海の変化を表すタイトルの通り、明るいブルーグリーンの海、刻々と変化し、足元に打ち寄せる柔らかな波、穏やかな波の音が聞こえてきそうな感じがしませんか。お帰りの際には1階展示室入り口から外を眺めて下さい。カロの《発見の塔》が見えます。開館時からずっとここで私たちを楽しませてくれています。

みなさんは何を感じられますか？



ガイドスタッフT

文谷有佳里 「ライブドローイングについて」

美術館のガラス面がここだけ華やか！ 2019年7月24日の公開制作で、仕上がって行く様子をお客様が直接見られるライブドローイング。一発勝負です！

黒くのびやかな線は作家の想いを乗せて高い所まで続きます。時には『そのペン書きやすいよね』などとお声もかかり、お客様との会話を楽しみながら和やかに。作品制作を通じて人とのつながりを大切にしています。私も挑戦したくなります。建築家が図面を描く様に、音楽家が作曲をする様に、描かれた作品からリズムカルなメロディーが聞こえて来るでしょう。コレクション展の入口にふさわしい作品です。



ガイドスタッフ O

鈴木昭男

《道草のすすめ - 「点音 (おとだて)」 and "nozo mi"》

2018-19

《点音》は美術館内と敷地内に点在する12個の白くて丸いプレート。《no zo mi》は屋外展示場にある5つの階段状のもの。足とも耳とも見えるマークが目印。見つけたらたぶん乗ってみたいくなる、そんな作品です。美術館で作品に乗っていいの？ そう思われるかもしれませんが、子どもの頃、駐車場の車止めブロックのような地面から少し高いところについ上ってみたいくなりませんでしたか？ そんな気持ちのまま、ぜひ《点音》に乗って、耳を澄ましてみてください。

12の《点音》の場所の地図もご用意しています。

手に入れて探検開始です！

ガイドスタッフ Y



宮島達男

《それは変化し続ける それはあらゆるものとの関係をつづ
それは永遠に続く》 1998

照明のない展示室に足を踏み入れ、奥でぼわんと赤い光を放つこの作品を見たとき、どんな印象を受けましたか？ 作品名の「それ」は作品そのものを指しています。変化し、関係し、続くこと。国境や人種といった枠組みを越えて共有できること。宮島作品で繰り返し語られるテーマです。

ちなみに今目の前にある作品は、2019年のリニューアルオープンにともない、一部修復されたものですが、約20年の間に1728個のデジタルカウンターは明るさに個体差が生じ、点かなくなったものもあったそう。私はこれにも命のようなものや時間の流れを感じてしまうのです。

ガイドスタッフF

